

第 2 節 川除屋敷裏遺跡の集落動態とその性格

川除屋敷裏遺跡の調査は道水路建設箇所が対象であったため、調査区は細長いトレンチ状となっており、面的な広がりを持つことが難しい。そのため遺構のまとまりや位置関係といった集落構造分析には適していない。しかし、各調査区の住居跡の時期を調べ、分布を検討すると時期ごとに遺構分布に相違が見られた。ここでは、住居跡軒数及び牛田古墳群・牛田廃寺跡の造営といったイベントを目安に画期を設定し、遺跡を 1～6 期に区分した。また記述の便宜を図るため、事業地全体を大きく A・B 区に区分し記載する。

以下では、各期における川除屋敷裏遺跡の様相について概説し、その動態について見ていきたい。

第 1 項 川除屋敷裏遺跡の様相（第 563・564 図・第 211 表）

牛田廃寺跡、牛田古墳群を含む川除屋敷裏遺跡では、平成 30 年度～令和 3 年度にかけての調査で 400 軒以上の竪穴住居跡が検出されている。調査面積は開発面積の 10%にも満たず、実際はこの何倍もの住居跡が存在すると考えられ、神流川左岸低地部に古代の大規模集落が展開することが明らかとなった。

弥生時代後期の樽式土器が出土した土坑が、本遺跡で最も古い時期の遺構であるが、住居跡は検出されていない。川除屋敷裏遺跡で住居跡が検出されるのは、5 世紀後半から 10 世紀にかけてであるが、時期によって分布及び数量に偏りがある。

遺構の増減と牛田古墳群、牛田廃寺の造営といったイベントを目安に、下記のように 1～6 期に便宜的に区分した。次に時期ごとの遺構分布図を用いて、1～6 期の遺構の平面的な分布と動態について見ていきたい。

時期区分

- 1 期：弥生時代、居住の開始（5 世紀）
- 2 期：6 世紀代 住居跡の増加
- 3 期：7 世紀前半。居住本格化、牛田古墳群造営開始
- 4 期：7 世紀後半。住居跡激増、牛田古墳群造営終了
- 5 期：8 世紀前半～9 世紀後半。牛田廃寺の造営と活動、牛田古墳群の再利用
- 6 期：10 世紀。住居跡の激減。川除屋敷裏遺跡の終焉

1 期：遺跡形成の開始（弥生時代後期）、居住の開始（5 世紀）

川除屋敷裏遺跡で最も古い時期の遺構は、弥生時代後期樽式土器期のものである（第 563 図）。事業地南端の 14・15 区で土坑が 2 基（892・1056 号土坑）検出されている。土坑内からは完形に近い大きな土器片が出土し、墓坑である可能性が高い。検出されたのは土坑のみで住居跡はなく、弥生時代の居住痕跡は明らかでない。他の調査区からも同時期の土器片が極少数検出されているが、遺構が発見されたのは 14・15 区のみである。

当該地で住居跡が初めて構築されるのは 5 世紀後半からであるが少数であり、分布も 2 区南端部周辺と 19 区に限定されている。他の調査区ではこの時期の遺構は検出されておらず、事業地の中心付近から小規模な単位で居住を開始したようだ。遺跡形成の最初期は南側の B 区に遺構が構築された（第 563 図）。

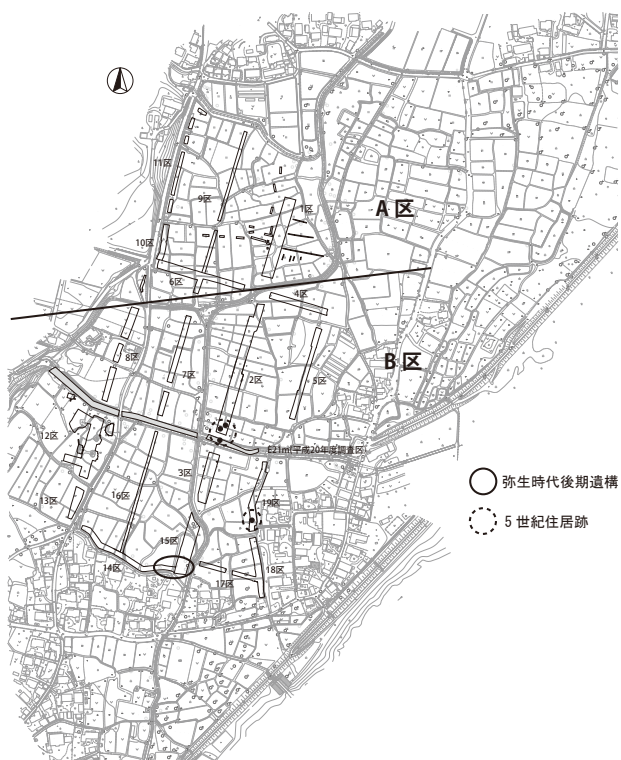
2 期：6 世紀代 住居跡の増加

6 世紀代になると住居跡数が増加する。1 期と同様に数は少ないが、分布域が 1 期より拡大する。6 世紀前半は 1 期と似た場所に分布するが、6 世紀後半になると分布域が広がり、A 区 9～11 区といった北側の藤岡台地寄りと南側の B 区 2・3・5・14～19 区で検出されるようになる（第 563 図）。

住居跡は、同一時期内で重複するものではなく、同一調査区内でも互いに距離を空け、単独で構築されているものが極めて多い。この様相は、川除屋敷裏遺跡と近接する笹川沿岸地区遺跡群で見られた激しく重複する 6 世紀代の住居跡群の様相と比較すると大きく異なる。

なお 2 期では、牛田廃寺跡や牛田古墳群周辺には居住跡は確認できない。

5 世紀



6 世紀



7 世紀



8 世紀



第 563 図 時期別住居分布図 (1)

9 世紀



10 世紀



第 564 図 時期別住居分布図（2）

3 期：7 世紀前半 居住本格化、牛田古墳群造営開始

7 世紀前半になると 12 区で牛田古墳群の造営が開始される。牛田古墳群は令和 2 年度の調査で 7 基の古墳が検出された古墳時代終末期の群集墳であり、7 世紀前葉から 7 世紀後葉にかけて古墳を築造していた。古墳時代以後も追葬が行われ、古墳周溝では牛馬を用いた祭祀等で再利用されていたことがわかっている。

古墳の造営開始に伴って、住居跡軒数も増加する。7 世紀前半では A 区南及び B 区で住居跡が構築される。A 区では 6 世紀には住居跡が作られなかった牛田廃寺跡周辺の 1・6 区でも住居跡が確認されるようになる。B 区では、6 世紀代と似た箇所に住居跡が構築されるが B 区北側には構築されておらず、牛田古墳群に近い B 区南側に構築される傾向がある。牛田古墳群周辺には住居跡は作られない（第 563 図）。

4 期：7 世紀後半 住居跡激増、牛田古墳群造営終了

4 期は川除屋敷裏遺跡で住居跡が激増する時期である。また 4 期で牛田古墳群の造営は終了する。3 期と比較すると倍以上の住居跡が検出されており、爆発的に増加する。住居跡の分布は 3 期の分布域が周囲に広がり、A・B 区のほぼ全域で住居跡が構築されるようになるが、8・12・13 区では引き続き住居跡は構築されていない。さらに A・B 区の間、尻無川から延長する用水路周囲では、住居跡は検出されておらず空白地が存在する。集落編成に関わる何らかの規制があった可能性がある（第 563 図）。

4 期の住居跡は、3 期の住居跡の周辺に展開することが多く、重複して構築するものが出現する。この傾向は 5 期にも継続して認められ、3 期もしくは 4 期の時期から住居跡構築箇所などの土地利用に関する何らかの規制が働き始めた可能性が考えられる。このような特徴は、単独で点在する住居跡が多い 2 期と大きな差異がある。笹川沿岸地区遺跡群では、住居構築のピークである 6 世紀に極めて密な重複が認められるため、住居跡軒数の増加（人間・世帯の増加）がこのような規制の要因とも考えられる。

また 4 期では、1～3 期ではほとんど見られなかった、床面積 20～40m² 以上の中型住居跡が増加する傾向があり、住居跡の大型化が見られる。

川除屋敷裏遺跡では、牛田廃寺創建直前の 4 期に住居跡数が激増し、もっとも顕著な画期と捉えられる。

5期：8世紀前半～9世紀後半 牛田廃寺の創建、牛田古墳群の再利用

5期は、牛田廃寺が創建される時期である。また同時に牛田古墳群の再利用も行われる。8世紀代を5期前半、9世紀代を5期後半と区分する。全体的な住居跡数は4期より減少するが、依然数が多い（第563図）。

5期前半の8世紀代の遺構分布の大きな特徴として、A区での住居跡数の減少がある。4期のA区では一定の軒数が確認されたが、5期になると住居跡の構築が低調になり、居住域としてあまり使われなくなる。これは牛田廃寺が造営されたことに要因が求められるだろう。一方、B区では4期に引き続き多数の住居跡が構築される。5期前半期では、B区が集落の中心域となる。4期と同様に床面積が20～40㎡の住居跡が一定数作られ、40㎡以上の大型住居跡が1軒確認された。大型住居跡の近接箇所には掘立柱建物跡が存在し、上位階層の住居跡であった可能性が高い。

B区で住居跡が構築されてこなかった8・13区にも住居が作られる一方、2区南東の17～19区ではほとんど見られない。また牛田古墳群がある12区でも住居跡は作られない。4期及び5期前半から集落内から鉄鉢形土器といった仏教系遺物が出土するようになる。またこの時期に7区で1号道路状遺構が構築される。

5期後半の9世紀代では、9世紀前半・後半で様相が異なる（第564図）。9世紀前半では、住居跡の構築はB区にほぼ限定され、分布域も非常に狭まり、住居跡軒数も減少する。この時期には、弘仁地震（818年、弘仁9年）が起こっており、群馬県内で大きな被害があったことがわかっている。牛田廃寺出土の瓦の分析から、牛田廃寺では大規模な瓦の葺き替えが行われていることが判明しており、弘仁地震が要因として推定された。9世紀前半における住居跡の減少と分布域の縮小も、弘仁地震に求められるかもしれない。9世紀後半になるとA・B区ともに広い範囲で再び住居跡が確認されるようになり、住居跡軒数も増加する。

6期：10世紀 住居跡の激減。川除屋敷裏遺跡の終焉

6期になると住居跡が急激に減少する。住居跡の分布に極端な偏りが見られ、A区では1区の牛田廃寺北側、B区では南端の14・17・18区といった外縁部に帯状にまとまって分布するほか、5区南に1軒だけ検出されている（第564図）。住居跡の床面積は小さくなり、20㎡以下の小型住居のみとなる。その中でも10㎡以下の住居が主体を占める。

5期後半と比較すると劇的に住居跡が減少している。6期の住居跡が分布するのは、地表面から浅い場所で砂礫層が検出される自然堤防上に該当し、当時は周辺より高い場所だったのだろう。6期で遺構が無い箇所には、確認面直上に土器細片や焼土・炭化物を含む土層が広範囲に堆積しており、神流川の氾濫による土層である可能性が考えられる。

10世紀で川除屋敷裏遺跡の集落としての機能は終わりを迎える。

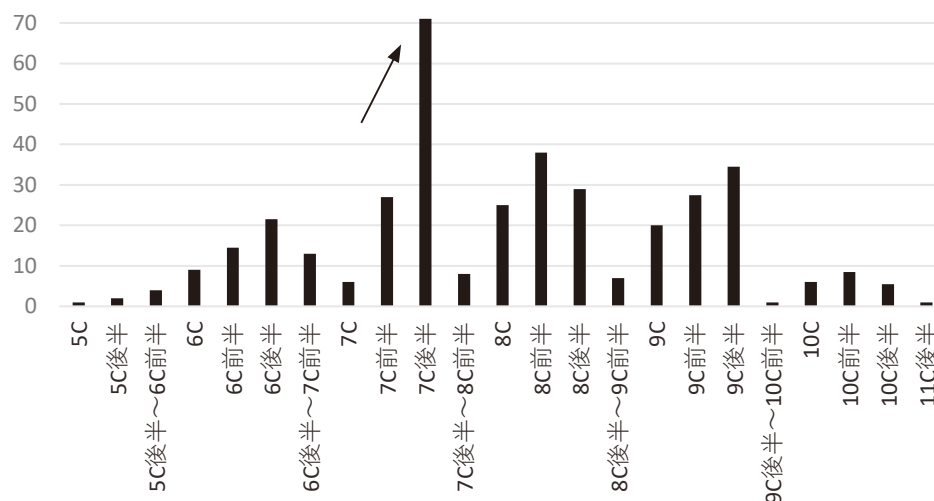
第2項 周辺遺跡との関係

川除屋敷裏遺跡西側の藤岡台地上には、5～10世紀の遺構が検出された大規模な遺跡群が展開している。それらの遺跡と川除屋敷裏遺跡の時期別住居跡軒数を比較してみると、住居跡数の増減に相関関係が見られた。

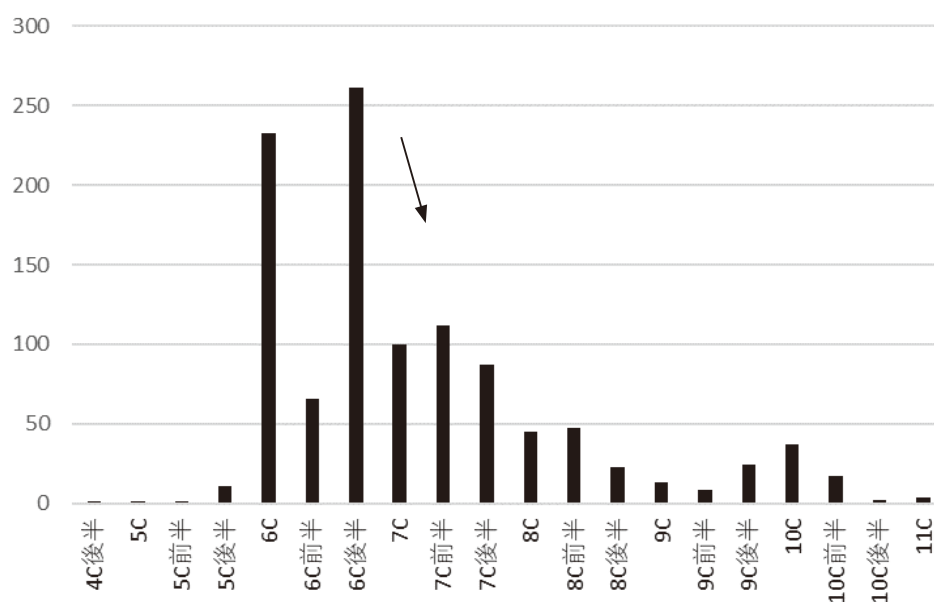
笹川沿岸地区遺跡群（第566図）

川除屋敷裏遺跡から北に500m程の藤岡台地上に展開する古墳時代の大集落である。県営基盤整備事業に伴い平成26～令和2年度にかけて発掘調査を実施し、1000軒を超える竪穴住居跡が検出された。調査面積は、41,596㎡である。住居跡は極めて密に重複しており、一定の場所に繰り返し住居跡が構築されていた。第566図は、時期が明確な住居跡を計数し、表にしたものである。6世紀代の住居跡が過半数を占める。前段階の4・5世紀の住居跡は極めて乏しく、6世紀に入り突然集落が構築された。7世紀には、住居跡軒数が6世紀の約半分になり激減する。8世紀にはさらに減り、11世紀まで住居跡が構築されるが、軒数は極めて少なく、集落は衰退していく。10世紀後半には遺跡形成は終了していた可能性が高い。

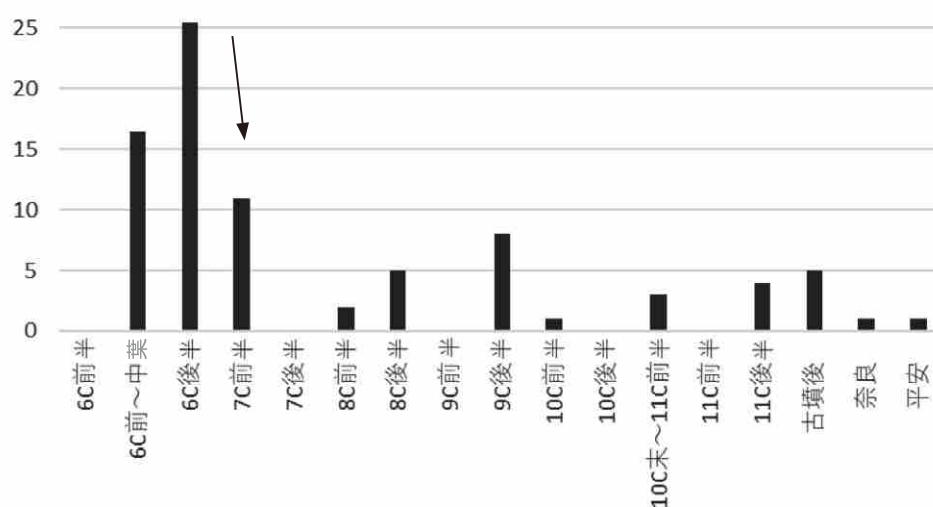
住居跡軒数のピークは6世紀であり、その後、急激に減少するという傾向が確認できる。



第 565 図 川除屋敷裏遺跡 時期別住居跡数増減グラフ



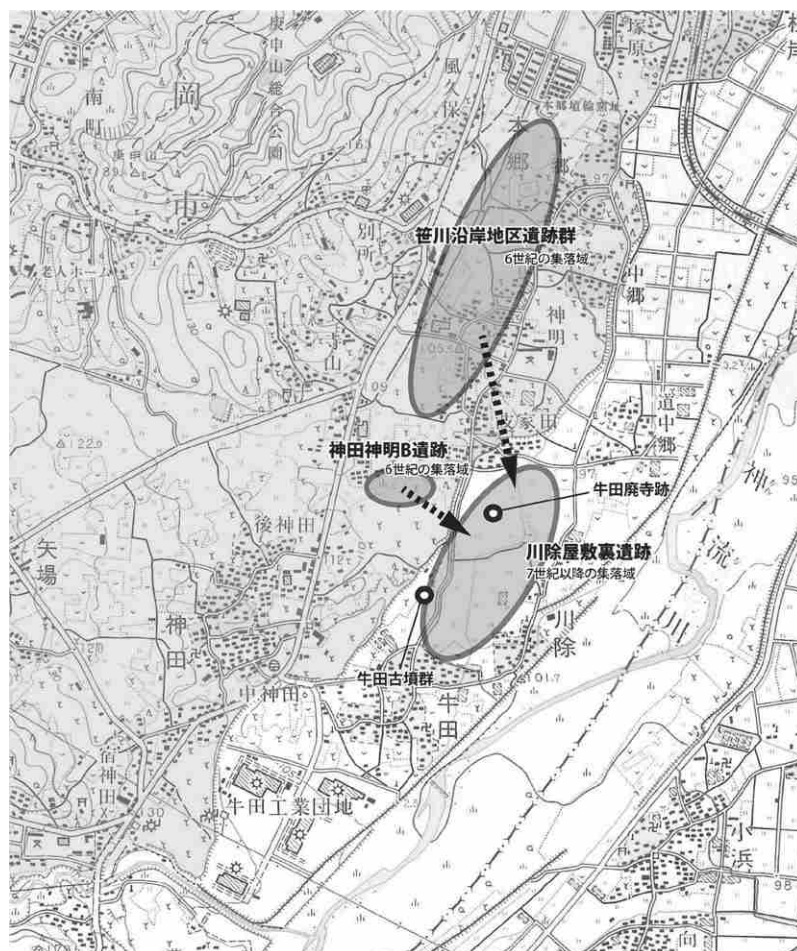
第 566 図 笹川沿岸地区遺跡群 時期別住居跡数増減グラフ



第 567 図 神田神明 B 遺跡 時期別住居跡数増減グラフ

第 211 表 川除屋敷裏遺跡時期別住居跡軒数表

	E32																			E21m	合計
	1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区	8区	9区	10区	11区	12区	13区	14区	15区	16区	17区	18区	19区		
5C																			1		1
5C 後半		2																			2
5C 後半～6C 前半		2																		1	3
6C		1									3				2			1	2		9
6C 前半		4	3		1								1						2	2.5	13.5
6C 中葉					1														1		2
6C 後半			2	1					1					1	2		3	1	7	2.5	20.5
6C 後半～7C 前半		1	2		1					1								2	6		13
7C		1			1						2				2						6
7C 前半	1	1	3	1	2	1	1		1	2					1			1	4	4	23
7C 中葉		1	3		4																8
7C 後半	3	13	13		1	4	1	2	1	2				5	4	6	2	3	6	1	67
7C 後半～8C 前半			2		1											2		3			8
8C	1	4							1					3	2	10			4		25
8C 前半	1	6	6		1	2	2	1					1	5	2	1			1	9	38
8C 中葉																					0
8C 後半		2	5		1	1	2	1			1			1	1	3			2	9	29
8C 後半～9C 前半			2		1									2				1	1		7
9C		1				1			1		2	1	2	1		9		1	1		20
9C 前半			2				3	3				1	1	6	2				2	4	24
9C 中葉		4	1											1	1						7
9C 後半	1	6	2				2	2	1	1			3	7	1		1			4	31
9C 後半～10C 前半																		1			1
10C														1			2	1	2		6
10C 前半	1													2	1		1	1	1	1	8
10C 中葉					1																1
10C 後半	4																			1	5
11C 後半																		1			1
時期不明	1	6	2	2		2	1			1	9			10	4	14	1	2	16	4	75
合計	13	55	48	4	16	11	12	9	6	7	17	2	8	45	25	45	10	19	59	43	454



第 568 図 周辺遺跡の動態

神田神明 B 遺跡（第 567 図）

令和元年度に防災公園造成工事に伴い、発掘調査が行われた。川除屋敷裏遺跡すぐ西側の藤岡台地上に位置し、古墳時代の集落が検出された。笹川沿岸地区遺跡群と森沢川を境に接しており、同一遺跡の南端部分として捉えられるかもしれない。第 567 図が時期別に住居跡数を計数した表である。6 世紀から住居跡が検出され、6 世紀後半が最も数が多い。7 世紀になると急減し、その後も住居跡の形成は低調である。

笹川沿岸地区遺跡群と同様に、住居跡軒数のピークは 6 世紀であり、その後、急激に減少するという傾向が確認できる。近接した藤岡台地上で調査された遺跡の住居跡軒数と比較した結果、川除屋敷裏遺跡とは住居跡軒数のピークが異なることがわかった（第 565 ～ 567 図）。低地の川除屋敷裏遺跡では、住居跡軒数のピークは 7・8 世紀でそれ以前の住居跡は少ないが、藤岡台地上の笹川沿岸地区遺跡群及び神田神明 B 遺跡では、6 世紀代の住居跡が最も多くその後は急減する。台地上と下で時期ごとの住居跡数の変動に相関関係があるといえる。笹川沿岸地区遺跡群及び神田神明 B 遺跡周辺で、6 世紀以後の大規模集落は川除屋敷裏遺跡だけであり、7 世紀代に台地上から台地下の低地に人が移動し、集落を構築した蓋然性が高い（第 568 図）。7 世紀に構築された牛田古墳群や 8 世紀第 2 四半期創建の牛田廃寺の造営とも関係すると考えられる。

このようなある時期に突如造営された集落については、「計画村落」（直木 1965・高橋 1979）と呼ばれており、川除屋敷裏遺跡もこれに該当する蓋然性が高い。

まとめ

川除屋敷裏遺跡全体の動態をまとめると第 212 表のようになる。当該地で最も古い遺構は弥生時代後期樽式土器期の土坑であるが、住居跡は検出されていない。住居跡が検出され居住が確認されるようになるのは 5 世紀後半からだが数は少なく、この傾向は 6 世紀後半まで続く。住居跡が増え始めるのは、7 世紀前半からで同時期に牛田古墳群の造営が始まり、これらは相互に連動している可能性が高い。この時期から低地の開発が始まったと考えられるが、本格化するのは 7 世紀後半からである。7 世紀後半になると住居跡数が激増し、一定の箇所に集中して作られるようになり、住居跡面積も大型化する。住居跡が多い傾向は、8 ～ 9 世紀まで継続し、8 世紀前半には牛田廃寺が造営され、道路状遺構も構築されるなど、川除屋敷裏遺跡の最盛期として位置付けられる。牛田廃寺は大規模な屋根の葺き替えを行っており、弘仁地震（818 年）に要因が求められる可能性が高い。地震による被害を受けたが修造を行った事実は、9 世紀前半においては牛田廃寺の存在意義がまだ失われていなかったことを示唆している。しかし 9 世紀後半には、牛田廃寺は廃絶され廃寺となる。集落は 10 世紀まで継続するが規模は非常に小さくなり、川除屋敷裏遺跡は終焉を迎える。

川除屋敷裏遺跡の成立を考えた場合、牛田廃寺の建立が契機となった可能性が高い。以下では牛田廃寺の性格についてみていきたい。

牛田廃寺は、「開発拠点型」（梶原 2017）に分類することができる。開発拠点型は「条理地割が敷設された沖積低地や扇状地など、水田地帯の微高地を選地し、複数寺院が密集して造営。」「高燥地を中心としてあらたな水田開発に伴い、寺田としての確保という経済的事情も存在か。」（梶原 2017）と定義された。牛田廃寺跡は沖積低地に選地しており、対岸の神流川右岸埼玉県側には城土野廃寺や臼樹原遺跡、五明廃寺、精進場遺跡といった寺院と

第 212 表 川除屋敷裏遺跡 動態表

川除屋敷裏遺跡	弥生後期	5 世紀	6 世紀	7 世紀	8 世紀	9 世紀	10 世紀
集落							
牛田古墳群							
牛田廃寺跡							
祭祀（古墳再利用）							
道路状遺構							

想定される遺跡が近接して複数造営されている。さらに牛田廃寺は、計画村落の構築に合わせて造営された可能性が高く、耕地開発等との関わりが予測され、開発拠点型の定義と合致するだろう。さらに梶原は、「寺院造営が、農業生産とリンクする形で展開した可能性を強く指摘したい。」(梶原 2017) と述べ、寺院造営と農業に密接な関係性があることを指摘した。牛田廃寺の造営に関しても新たな耕地開発との関連性を考えたい。

川除屋敷裏遺跡周辺の低地開発は、7 世紀前半に一部始まっている可能性があり、住居跡数の増加と牛田古墳群の造営が開始される。その後、7 世紀後半に開発が本格化し、牛田廃寺造営が開始されたことが読み取れ、牛田古墳群と牛田廃寺の連続性及び造営主体の同一性が示唆される。

地方における寺院の造営については、「地方豪族による氏寺の建立は、国家の打ち出した方針に沿って僧尼の活動の場を提供するという実践的側面よりも、むしろその感覚的な側面を重視し、豪壮な伽藍を建立すること自体に意義を見出していたと考えて大過ないのではないだろうか。」(本郷 2005) と指摘された。牛田廃寺造営にもこのような側面があったのなら、集落における仏教遺物の僅少さについても整合的に理解することができる。つまり、牛田廃寺は村落内寺院と共通性が存在するが、在地氏族が造営した氏寺であり、氏族のための寺院であったといえるだろう。牛田古墳群では、牛馬骨が検出され、牛田廃寺や住居跡からは馬鋤や馬具が出土している。牛は、「奈良後期から平安初期における寺の経営において牛が重要労働力」で「寺田における牛耕が身近な風景」(藤本 2003) と考えられており、寺の重要な構成物と考えられている。牛骨の出土は、牛田廃寺跡及び川除屋敷裏遺跡の経済力の高さを示していると同時に、牛田廃寺を「寺」として把握できる根拠とできるだろう。

造営氏族は、牛田古墳群と関係がある可能性が高く、牛田廃寺造営後もなお牛田古墳群で牛馬骨と須恵器大甕を用いた祭祀を執行している。旧来からの祭祀を行うことで、牛田古墳群が「氏族紐帯の再確認を行う場」(小田 2003) として継続的に利用されていたと考えられる。これは裏を返せば「仏教」という思想・仕組みが、在地氏族が必要とする機能を十分に果たしていなかったとも考えられる。このような状況の中では、集落の構成員に仏教思想や信仰が十分に行きわたらず、醸成されていなかった可能性が高く、それが集落内の仏教遺物の僅少さに繋がっていると考えることができる。

寺院造営にあたっては、「地方在地豪族が、律令体制の完備してゆくなかにあって、従来自分たちの支配下にあった経済的な基盤を、公にするのをのがれるために、土地・奴婢の所有が認められている寺に振り返るかたちで、公収をまぬがれる口実にしたのではないか」(間壁 1970) と経済的な側面からも考察がされており、牛田廃寺もこのような流れのなかで造営された可能性が高い。牛田廃寺が造営されたと考えられる 8 世紀第 2 四半期には、霊亀 2 (716) 年の「寺院併合令」の方針転換が天平 7 (735) 年に行われ、寺院造営や修造が再び奨励されるようになる。牛田廃寺の造営にはこのような国家的な動向も考慮に入れる必要がある。

牛田廃寺から南に 3km 程の神流川左岸には、緑野寺(現：浄土院浄法寺)が所在する。牛田廃寺よりやや新しい 8 世紀後半に創建されたと考えられ、牛田廃寺とは時期的に併存するが、今のところ緑野寺で採集されている瓦の比較からは、両者に関係性を見出すことはできない。緑野寺の創建には、道忠という利他行を实践した高僧が関わっており、道忠教団を組織し、緑野寺などを拠点に布教を展開したと言われている。そのため氏寺である牛田廃寺とは、建立経緯や役割が異なる可能性が高く、瓦の相違もそのような造営主体の相違を反映している可能性がある。

緑野寺は、中世の戦乱において大部分が焼失してしまい、古代の様相についてはほとんどわかっていない。牛田廃寺と緑野寺の関係性、群馬県とその周辺の仏教受容や動態についての解明が今後の課題となる。

参考文献

- 小田裕樹 2008 「奈良県葛城市三ツ塚古墳群・古墓群の形成過程—古代氏族墓地の基礎的研究—」『九州と東アジアの考古学 上』九州大学考古学研究室 50 周年記念論文集刊行会
- 梶原義実 2017 『古代地方寺院の造営と景観』吉川弘文館
- 高井佳弘 2013 「弘仁の地震と上野国の瓦葺き建物—地震の被害と復興—」『古代東国の考古学 2 古代の災害復興と考古学』高志書院
- 高橋一夫 1979 「東国集落の遺跡の検討 報告 1. 計画村落について」『古代を考える』第 20 号 古代を考える會
- 直木孝次郎 1960 「日本靈異記にみえる「堂」について」『奈良時代史の諸問題』

直木孝次郎 1965 「古代国家と村落 - 計画村落の視角から -」『ヒストリア』第 42 号 大阪歴史学会

藤岡市教育委員会 2005 『G1 藤岡市下日野金井窯址群 G4 金山下遺跡・金山下古墳群 G3 平井詰城』

藤岡市教育委員会 2012 『川除屋敷裏遺跡・神田丸沢遺跡・神田吠谷戸遺跡・神田池田遺跡・神田神明遺跡・神田吠谷戸 B 遺跡』

藤岡市教育委員会 2021 『E33 神田神明 B 遺跡 C 地点』

藤岡市教育委員会 2021 『笹川沿岸地区遺跡群（本郷下郷 C 遺跡、本郷下郷 B 遺跡 B 区、本郷山根 B 遺跡、本郷山根 B 遺跡 B 地点）発掘調査報告書』

藤岡市教育委員会 2022 『笹川沿岸地区遺跡群（本郷大神裏遺跡、本郷薬師堂遺跡）発掘調査報告書』

藤岡市教育委員会 2022 『笹川沿岸地区遺跡群（本郷下郷 A 遺跡、本郷下郷 B 遺跡、本郷下郷 B 遺跡 C 区、本郷下郷 B 遺跡 D 区、本郷下郷 B 遺跡 E 区、本郷塚原 A 遺跡、本郷花ノ木 A 遺跡、本郷花ノ木 B 遺跡、本郷花ノ木 C 遺跡、本郷花ノ木 D 遺跡）発掘調査報告書』

藤岡市教育委員会 2022 『笹川沿岸地区遺跡群（本郷別所遺跡、本郷薬師堂遺跡）発掘調査報告書』

藤岡市教育委員会 2023 『牛田古墳群（E32c 川除屋敷裏遺跡 12 区）』

藤本 誠 2003 『『日本霊異記』における仏教施設と在地仏教』『史學』第 72 巻第 1 号 三田史学会

本郷真紹 2005 『律令国家仏教の研究』法蔵館

松田 猛 1991 「平安時代初期の地震—『類聚国史』弘仁 9 年の記事を中心に—」『群馬県史研究』第 34 号

松田 猛 2018 「史料にみる弘仁地震と上野国」『シンポジウム 弘仁地震の実像に迫る - 平安の関東地方北西部の大震災 -』発表要旨集

間壁葎子 1970 「官寺と私寺」『古代の日本 4』